

ブラジルで活躍する菊池義治先輩(産業開発青年隊第5期移住班)

産業開発青年隊同窓会 会長 鈴木 浩明

さる2022年10月20日、興徳寺松永先輩より、ブラジルより5期の菊池さんが来日した。昼飯を一緒に食べようと連絡をいただきました。お会いすると、すごい人でした。多分産業開発青年隊の卒業生の中で一番の成功者ではないでしょうか。自宅に帰った後どのような人物か気になり、インターネットを開き探してみると、記事が載っていました。次の通りです。海外最大の日系人団体であるサンパウロ日伯援護協会(略称は援協、会員約1万3000人)の会長として活躍する菊地は、2014年3月24日に「サンパウロ名誉市民章」を受章した。また2012年3月26日には天皇陛下のお招きにより、皇居で天皇皇后両陛下と菊地及び菊地夫人のマリーザの4人だけでブラジル談議に花を咲かせたという、品性も備わっている。

1940年に岩手県で生まれた菊地は、「少年期から実家の農作業より近所の子供たちの面倒を見るほうが性分に合っていた」というから、「世のため人のために尽くす」という今のボランティア活動のリーダー職が宿命づけられていたのかもしれない。

「何事にも挑戦してくじけずに向かって行くという心が大切」ということを座右の銘にしている菊地は、7歳から12歳までの小学生時代には自宅から学校まで毎日6キロの道を徒歩で通い続けた。岩手県の冬は雪が深い時には馬車の後ろに乗って学校に行く日もあった。「自分の負けじ魂はこの時に鍛えられたように思う」と数々の困難に打ち勝ってきた自分の原点を見つめるようにこう語る菊地。こうして18歳まで一関市で育った。男2人、女4人の兄弟で次男として育った菊地は、11歳の時に母が亡くなり祖母の己代に育てられた。己代の父は村の村長を務めた立派な人だった。

「戦後の厳しい日本の現状よりも人生の新天地を求めて新しい大地のブラジルで生きていこう」。こう決意した菊地がブラジル移民の話を持ち出した時、祖母は「何もあんなに遠いブラジルまで行くことはないだろう」と一言いったきりだった。一方の父は「お前自身の人生だ、悔いのないように自分の人生を切り拓いて生きろ」と理解してくれた。こうして菊地は1959年に「あるぜんちな丸」で45日間かけてブラジルに移住した。移民船の中では「もう二度と祖国日本の土は踏めないだろうと思うと泣けて泣けて涙が止まらなかった」という純情一途な19歳の少年だった。

この時の移民の肩書きは建設省(当時)所管の南米産業開発青年隊の一員だった。派遣移住先はサンパウロから1500キロ離れたパラナ州セーラ・ド・ラードで、原始林を斧で切り拓き、飛行場を造り、綿花の栽培地を開拓し、水田開拓地を造るなど、さまざまな土木作業に励んだ。仲間たちとともにこの過酷な労働に耐えて菊地も丸2年間頑張った。

63 年の 22 歳の時にサンパウロに移り、慣れない商売人の人生が始まった。青果商、家具商、衣類販売などあらゆる小売り商売に挑戦し続けてきた。

そして宅配飲食業で本業となるチャイナ・イン・ボックスと出会った。現在の飯の種類であり、今からちょうど 20 年前の話である。今チャイナ・イン・ボックス チェーンはブラジル全土に250店舗以上、サンパウロ市内に 60 店舗ある。菊地は 94 年にフランチャイズのメンバーとして会社を設立した、ハルミ・アリメントス社である。社長は娘の渡辺・菊地・サンドラ・ハルミで菊地は会長になっている。同店は「味と新鮮さ、注文を受けてから宅配するまでのスピード、誠実 でお客様を大切にする」。このサービス品質で顧客からの評価と支持を集めている。ハルミ・アリメントス社はチャイナ・イン・ボックスの全店舗の総合力評価で、過去5年間で1位が2回、毎年ベストテン入りしている超優良店になっている。菊地 は「今後もお客様のニーズに合わせていく」方針という。

菊地自身は現在まで 45 年間にわたりボランティア活動に携わっているが、そのバックボーンとなる3カ条がある。

「自分への(精神的)価値と代償がない代わりに、どんな仕事にも挑戦し責任をもって可能性を見つけ出す努力は常に新しい発見がある」、「仏教の教養を学ぶ」、「人に対する協力、人の嫌がる仕事、下積みの仕事、表に出ない仕事にも達成感と充実感がある」と無私と奉仕の精神に支えられた菊地の精神領域には、自ら鍛えに鍛え上げ自分を磨き上げた、人徳が身に備わっている。

特に菊地を評価したい点は、海外日系人最大規模の団体であるサンパウロ日伯援護協会会長としてこの組織をまとめ上げ、健全な財務体質に体質転換を図り、日系社会とブラジル社会、そして世のために必要とされる人と組織を 最大限に活性化させていることだ。この菊地の組織経営力と組織運営力は先の確かな信念と信条の3カ条に支えられた、名リーダーとしての指導力と統率力を 伴った人物であることもよく分かる。

今菊地が日常全力で務めているサンパウロ日伯援護協会とは、移住者援護と日系社会及びブラジル社会への医療と福祉サービスを行う団体で、会員数約1万3000人を誇る海外最大規模の日系人団体で、雇用者数は2000人(内1500人が医師と看護婦)を超える。

今や日系コロニアのシンボリックな団体で日系社会からだけではなく、ブラジル社会からも頼りになる援協として今後に対する期待と役割は一段と大きくなっている。その多忙を極める援協会長とはどのような仕事を聞くと、「日系社会とブラジル社会に必要とされる事業の推進、高齢化社会への介護支援の役割、特殊障害者への社会的平等、日本人の特質(正直・勤勉・努力)をブラジル社会への対応と還元など多くの案件」がある。

援協の今後の在り方については「ブラジルに移住してきた多くの人たちがこの国に

移住して良かった、ブラジルが安住の地と安らぎのある環境としての支援をつくっていききたい」という。

その菊地はサンパウロ日伯援護協会会長だけにとどまらず、さまざまなボランティアにも参加している。自閉症青空学級顧問、ブラジル地域リーダーふるさと創生協会副会長、ブラジル岩手県人会名誉会長、リベルダーデ商工会評議員会副会長、など数多い。さらに日本国際協力財団の神内良一理事長、日本財団の笹川陽平会長をはじめ、ブラジル日本商工会議所関係者からも「菊地さんの行動力を評価するとともに支援した事業に対してもきっちりと報告してくれる結果責任を 持っている」、と菊地に対する信頼と評価はお世辞抜きで高い。

菊地は「ここまで多くの皆様にお世話になり周りの人たちに支えられてやってきた、健康が第一条件、苦しい時に情熱を燃やした、貧乏こそエネルギーで逆境に耐えることも学んだ」と陰徳精神も身に着けた。

ブラジルで日系人コロニアを誇りと思う時はどのような時か、を聞いたところ「日本の日本人よりも个性的で日本の精神文化を継承している、日本人の良さとブラジルのサラダ文化など民族文化が入り交じる中で競合して鍛え上げた国際感覚を持った人が多い」。

同時に日本へのメッセージとして菊地は「ブラジルには150万人という海外最大の日系人が住んでいる大国です。そこでまず文化交流、次にブラジルは南米市場の中心で経済交流の拡大活発化、そしてブラジルは平和的な多民族国家で日本はより積極的に人的交流に務めてほしい、と願っています」と結んだ。（敬称 略、筆者＝カンノ エージェンシー代表・菅野英明）

サンパウロ新聞 2014 年 5 月 13 日付

素晴らしい先輩との出会いに感激をし、来年迎える産業開発青年隊創設70周年記念大会に向けて、努力を惜しまず活動しようという思いが高まりました。皆様方のご協力お願いいたします。

